紅陵に命燃ゆ

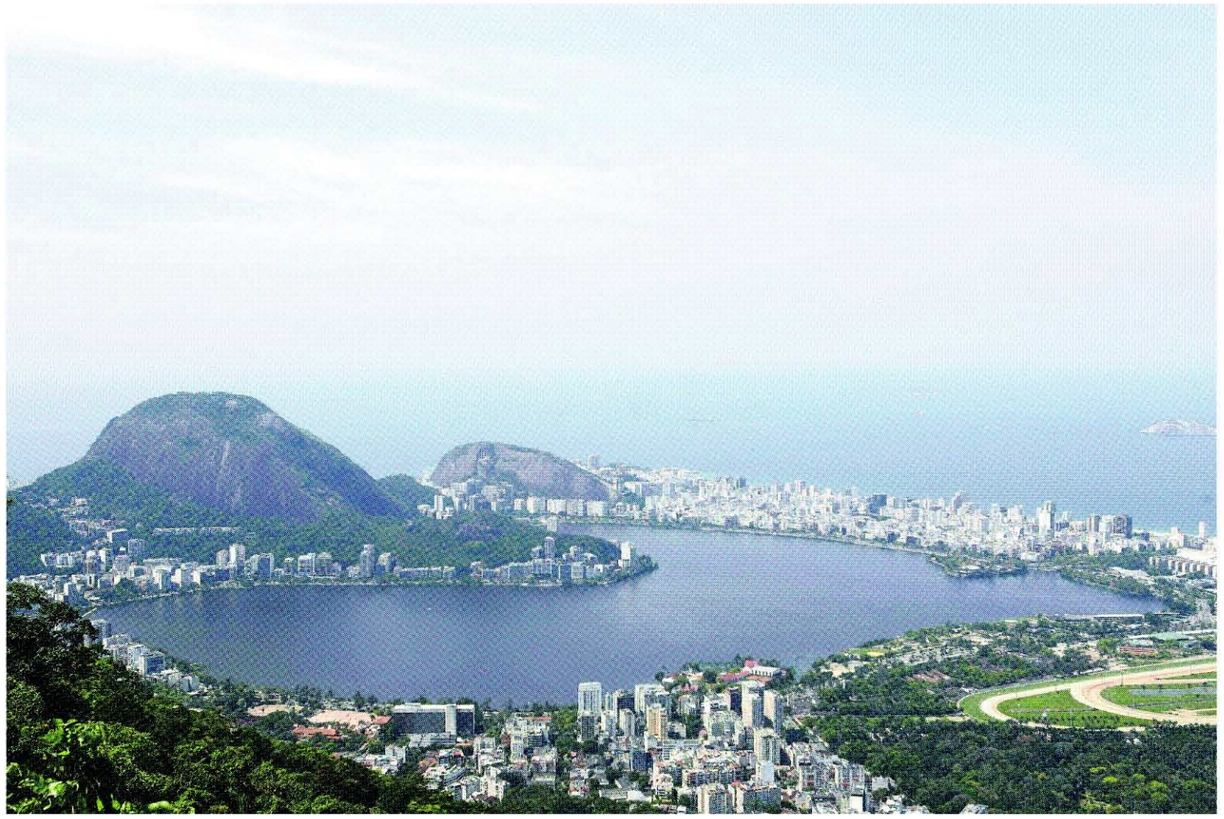
文・皿木喜久　題字・藤渡辰信

「地球の裏」へ、集団で旅立ち

その13　南米移住

㊤ブラジル移住団が中継地としたリオデジャネイロ。すっかり近代化し、2016年には夏季オリンピックが開かれる
＝2009年９月（AP）

㊦ブラジルに向け出発する移住団（前）と見送る拓大関係者
＝拓殖大学創立100周年記念『右手に文化の炬をかかげ』より



募集広告でブラジルへ

昭和33年10月4日、横浜港を出航した「あるぜんちな丸」に計10人の拓殖大関係者が乗っていた。「第一次ブラジル移住団」と称する卒業生7人とその家族で、拓大の学生や教職員らの盛大な見送りを受けての船出だった。

移住団は大学内に張り出された「南米移住」募集広告を見て集まった人らで結成された。都下・花小金井にある大学農場に合宿し、農業の実践やブラジル語について学んだ後の出発だった。

行く先はブラジルのリオデジャネイロの北東約７００キロ、大西洋岸のカラベラスという町からさらに川をさかのぼったサンタルジアという所だった。来日中に移住団のことを知ったブラジルの会社経営者、クーニャが自らの土地を提供すると申し出たのだ。

当時、南米などへの移住は、海外協会連合会が企画して送り出すか、先に移住した人が呼び寄せるのが普通だった。大学で移住団を組むというのは異例である。

しかし結果的には、この移住団はとても成功とは言えなかった。団員の一人だった金子登が、渡航から44年後の平成14年、同窓会誌『拓窓』に寄せた「顚末記」によるとこうだ。

一行はリオデジャネイロから飛行機と船を使い、横浜を出て40日ばかりでサンタルジアに着いた。だがそこは農園にはとても不向きなやせた土地だった。

それでも森の木を切って焼き、その跡に米やマンジョカ（タピオカ）や甘藷（かんしょ）、サトウキビなどを植え、農業を続けた。さらに川で魚を釣ってタンパク質を補い、休日にはフットボールを楽しんだ。

しかし1年もたったころから団員の間に不協和音が生じた。

あまりに不毛の地で、こんな原始的な農業しかできないというのは、当初の「夢」からかけ離れ過ぎている。それにマラリア熱の脅威もあった。

大学にできた「移住研」

あれだけ大学関係者から期待を込められて送り出された以上、オメオメとは帰れない。そんな「世間体」も気にはなったが、まともな生活ができなくては仕方ない。1人抜け2人抜けで移住団は解散に追い込まれた。

金子もまた、ブラジル国内のサンパウロに出て、日系商社につとめる。後には自ら貿易会社を経営することになる。

金子は、クーニャ側との事前の意思疎通がはかられていなかったことが、「敗因」だったと書いている。

だがそうであっても、国際情勢がまだ混沌としていたあの時代にこぞって「地球の裏側」に船出した勇気まで否定されることではないだろう。

拓殖大学で南米への移住熱が強まったのは、日本が独立を回復した昭和27年ごろからだという。

日本人の近代移民は明治初期に始まった。移住先は満州などへの「国策移民」を除けば北米と南米がほとんどだった。建学以来「海外への雄飛」をうたってきた拓大の卒業生にはアジアばかりでなく南米に移住する者も多かった。

しかし敗戦により、日本は台湾や朝鮮半島、満州など海外活動の拠点を失い、日本列島とその関連島嶼（とうしょ）に閉じこめられてしまった。そのことはとりわけ拓殖大学にとって「死活問題」となった。

そうした閉塞（へいそく）感を打開するために海外移住問題に詳しい鳥谷寅雄が、当時の総長、八田嘉明に「海外への発展を考える講座を開くべきだ」と提案した。鳥谷を講師とする「海外移住特別講座」が開設される。29年のことだった。

これがきっかけとなり、29年には鳥谷を囲む形の学生サークルである「海外移住研究会（移研）」ができた。発足当時から40～50人の会員がおり、関連サークルとしてラテン・アメリカ研究会やブラジル研究会もできたという。

さらに翌30年には拓大をはじめ東京農業大、早稲田大、中央大、天理大などの学生が集まり「日本学生海外移住連盟」（学移連）が結成され、拓大の高橋順治郎が初代委員長になった。

ほかにも海外研究を目的とした学生の連合体が次々と生まれる。まるで戦後約10年間、海外に出られなかった鬱憤（うっぷん）を晴らすかのように海外渡航の機運が強まった。

パラグアイにも足跡残す

そしてこうした空気の中、拓殖大ブラジル移住団のような団体で、あるいは個人で海外移住を試みる若者が増えた。ブラジル移住団のように、途中で方向転換を余儀なくされた例もあるが、みごとな成果を挙げた人も多い。

例えば拓殖大学を32年に卒業した菅原昇は同年11月、横浜港を出発して、南米パラグアイのチャベスに入植した。農業の知識や技術はほとんど持たなかったが、原始林を切り開いて農地や牧場を開くことに成功した。

そればかりでなく、パ日混合農業協同組合の事務責任者としてパラグアイと日本双方からの入植者のパイプ役をつとめ、日本人移住者の相談役ともなった。

パラグアイは今年のサッカーW杯の決勝トーナメントで日本を破ったことで日本人におなじみになった。ブラジルなどに隣接し、南米大陸のほぼ中央にある内陸国である。日本人の移住は昭和11（1936）年に始まり、現在も4千人近い在留邦人がいる。

親日家が多いというが、それも菅原らの努力によるものといっていいだろう。

現在海外で活動する日本人の形態はビジネスマンから技術者、ボランティア、留学生、芸術家と実に幅広く、海外生活を経験した人はもはや数え切れない。しかし戦後、渡航も困難な時期にその先導役になったのが、南米を中心とした移住者や入植者だったことは忘れてならない。

拓殖大学百年・小史『世界に天駆けた夢と群像』によれば、南米各地に散在する「学友」は約300人に上るという。そのほかにも移住者たちの2世、3世がそれを引き継ぎ、祖国に思いを寄せながらがんばっていることだろう。

（敬称略、毎週土曜日掲載）

戦前の移住・移民

「移民」と呼ばれることが多かった近代の移住は、明治元（1868）年、ハワイへの153人から始まったとされる。北米や中南米の農業従事者が中心で、先の大戦の敗戦前後の一般在外邦人は北米約41万（うち約半数がハワイ）、中南米が24万（平凡社大百科事典）という。移住する日本人は、熊本、山口、広島、沖縄など西日本の出身者が多かった。

しかし北米、特に米国では安い賃金で働く日本人への反発が強まってくる。大正２（1913）年、カリフォルニアの州法で日本人らの土地所有が禁じられたのをはじめ、同13（1924）年にはいわゆる排日移民法ができ、米国への移住は事実上不可能となった。

このため日本の親米派の間にも反米意識が強まった。さらに満州などへの国策移住も増え、不安定な国際情勢の大きな一因となった。